

令和3年2月14日

白木賢信（常葉大学）

## I 調査結果の概要

1. 利用団体のプロフィール（利用団体の種類・利用団体の主たる年齢層）については、小学校相当が殆どを占めつつある。例えば、「小学校」では、1～3年目は20%台、4～7年目は30%台で推移しているが、8年目で40%台、9～10年目で50%台に達し、11年目以降は60%台に達している。
2. 利用目標の種類について、「自主性や協調性、社会性を身につける」は13年間を通じて常に最も比率の高い項目である。4年目以降は60%以上の比率で推移し、特に9年目と12年目は70%台に達し、13年目では80%を超えている。次いで比率の高い項目については、6年目以降は「自然に対して興味・関心を持つようになる」である。
3. 利用後の参加者の変容について、「自ら進んで手伝いや行動をするようになった」の比率は、4年目までは30%台、5～11年目は40%台で推移し、12年目で50%、13年目で60%に達しており、13年間で28ポイント上昇している。「時間を守るようになった」及び「周りの人に優しく接するようになった」も同じような推移の仕方をしており、13年間でともに10ポイント以上高くなっている。「仕事などを積極的にするようになった」は、7年目までは20%台、8年目以降は30%台で推移しており、13年間で12ポイント高まっている。
4. 繰り返し利用することによって予想される変容について、調査が行われた12年間通じて、「時間を守るようになる」「自ら進んで手伝いや行動をするようになる」「周りの人に優しく接するようになる」の上位3項目は変わらない。特に、「自ら進んで手伝いや行動をするようになる」の8年目以降は、60%以上を保ち、かつ第1位の比率である。「時間を守るようになる」は、11年目までは50%前後で推移していたところ、12年目で60%に達している。

## II 調査の概要

### 1. 目的

本調査の目的は、静岡県立朝霧野外活動センター（以下、センターと呼ぶ）利用団体のセンター利用による教育的効果の一端を明らかにすることである。それにより、施設の評価は利用者数の増減に頼るところが大きい中、それ以外の評価指標としての基礎資料を提示する。あわせて、2007～2019年度の13年間における経年変化の傾向も提示することにした。

### 2. 内容

上述の目的を達成するために、センター利用による教育的効果に関する調査を行うが、その内容は以下の通りである。

- (1) 利用団体の種類
- (2) 利用団体の主たる年齢層
- (3) 利用宿泊数
- (4) 利用を通じて参加者に期待したこと（利用目標）
- (5) 利用目標の達成度
- (6) 利用後の参加者の変容
- (7) 繰り返し利用することによって予想される変容

### 3. 対象

2019年度のセンター利用団体

### 4. 方法

質問紙による配付回収法で、具体的な手順は次の通り。

- (1) センター担当職員が、各利用団体担当者に、利用期間中にアンケート形式の質問紙を配付する。
- (2) 各利用団体担当者は、センター利用後約1ヶ月の間に質問紙に回答し、回答済の質問紙をファックスでセンター宛に返送する。

### 5. 調査票（質問紙）の回収状況

回収数（率） 88（15%）      有効回収率 88（15%）

なお、ここで算出した回収率・有効回収率は、2019年度におけるセンター利用団体数（594団体）を母数としている。

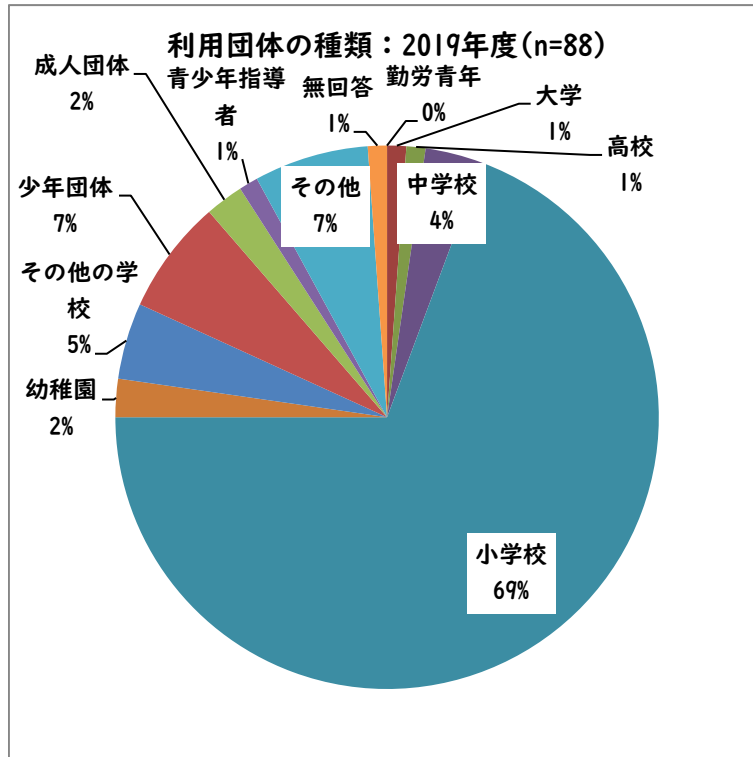
### 6. 実施期間

2019年4月～2020年3月

### Ⅲ 調査の結果

#### 1. 利用団体のプロフィール

最初に、本調査の対象となった利用団体のプロフィールについて述べることにしよう。まず、利用団体の種類についてであるが（図1）、最も比率が高いのは「小学校」（69%）で、次いで「少年団体」及び「その他」（ともに7%）、「中学校」（4%）が続いている。なお、学校関係は全体の80%以上を占めている。



#### 「その他」の内訳

キリスト教会の日曜学校及び父母・教会\*（判読不能）。塾（英会話）。任意団体。任意団体（少年教育）。民間学童保育。

図1 利用団体の種類

この利用団体の種類について、13年間の変化について示したものが図2である。これによると、「小学校」は、1～3年目は20%台、4～7年目は30%台で推移しているが、8年目で40%台、9～10年目で50%台に達し、11年目以降は60%台に達している。一方「少年団体」は、8年目までは概ね20%前後で推移しているが、9年目以降は20%を下回り、特に10年目及び12年目以降は1ケタ台の比率である。「中学校」も同様の傾向で、1～7年目は10%台、8年目以降は1ケタ台の比率で推移している。

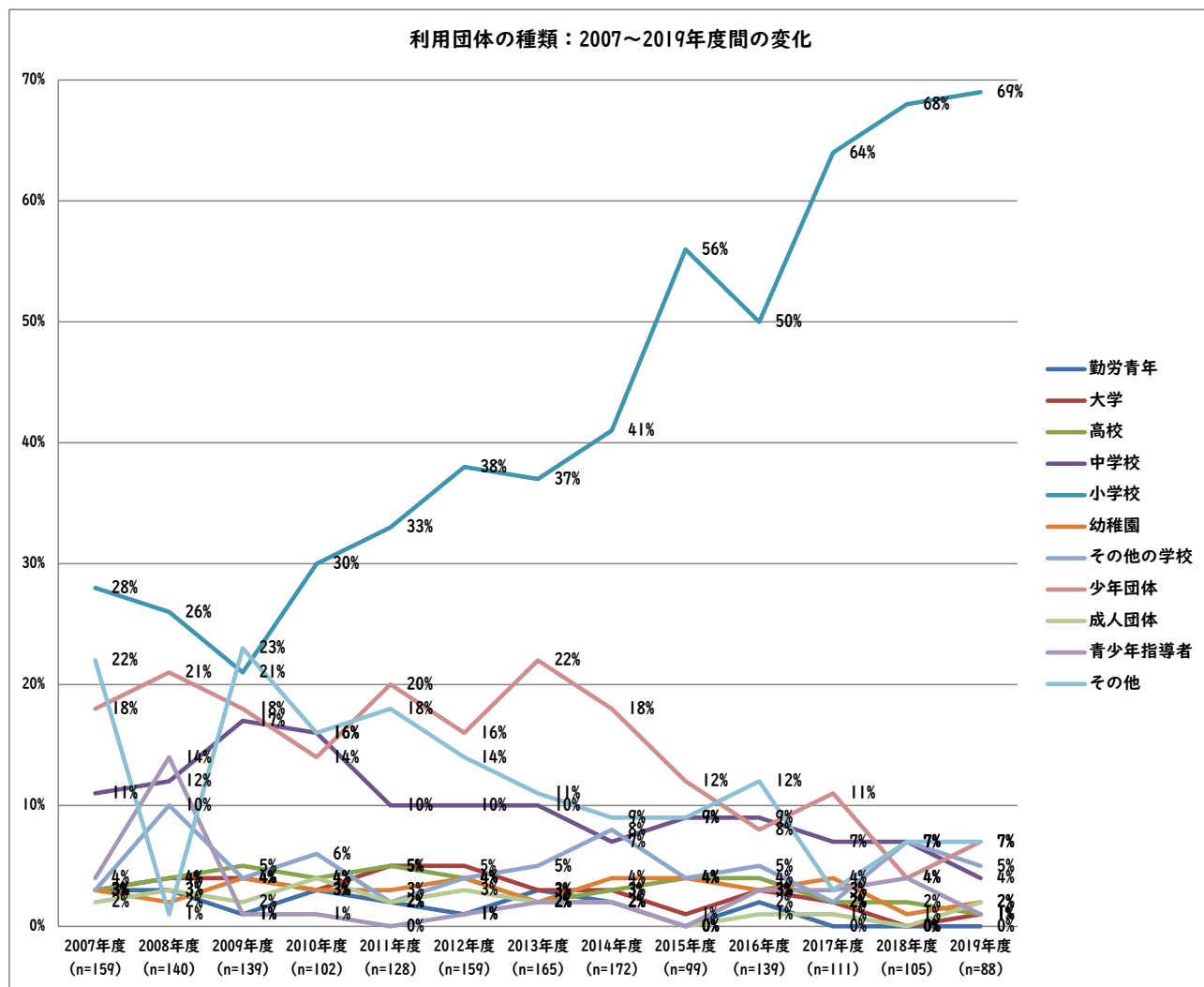


図2 利用団体の種類：2007～2019年度

次に、利用団体の主たる年齢層について（図3）、最も比率の高いのは「7～12歳」（82%）で、次いで高いのは「13～18歳」（11%）で、両者で全体の9割以上を占めている。

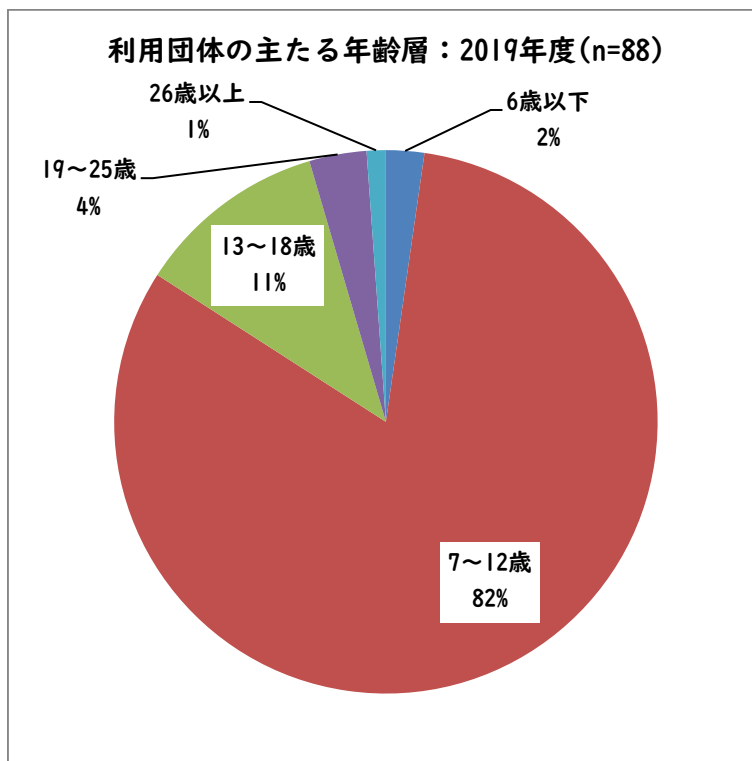


図3 利用団体の主たる年齢層

この利用団体の主たる年齢層を13年間の変化でみると（図4）、「7～12歳」は、4年目までは50%前後で推移し、5年目以降は60%を超え、12年目以降は80%台に達している。一方、「13～18歳」は、5年目までは20%台、6年目以降は10%台で推移しているが、13年目は11%までに落ち込んでいる。なお、その他のカテゴリーは、概ね1ケタ台の比率で推移している。

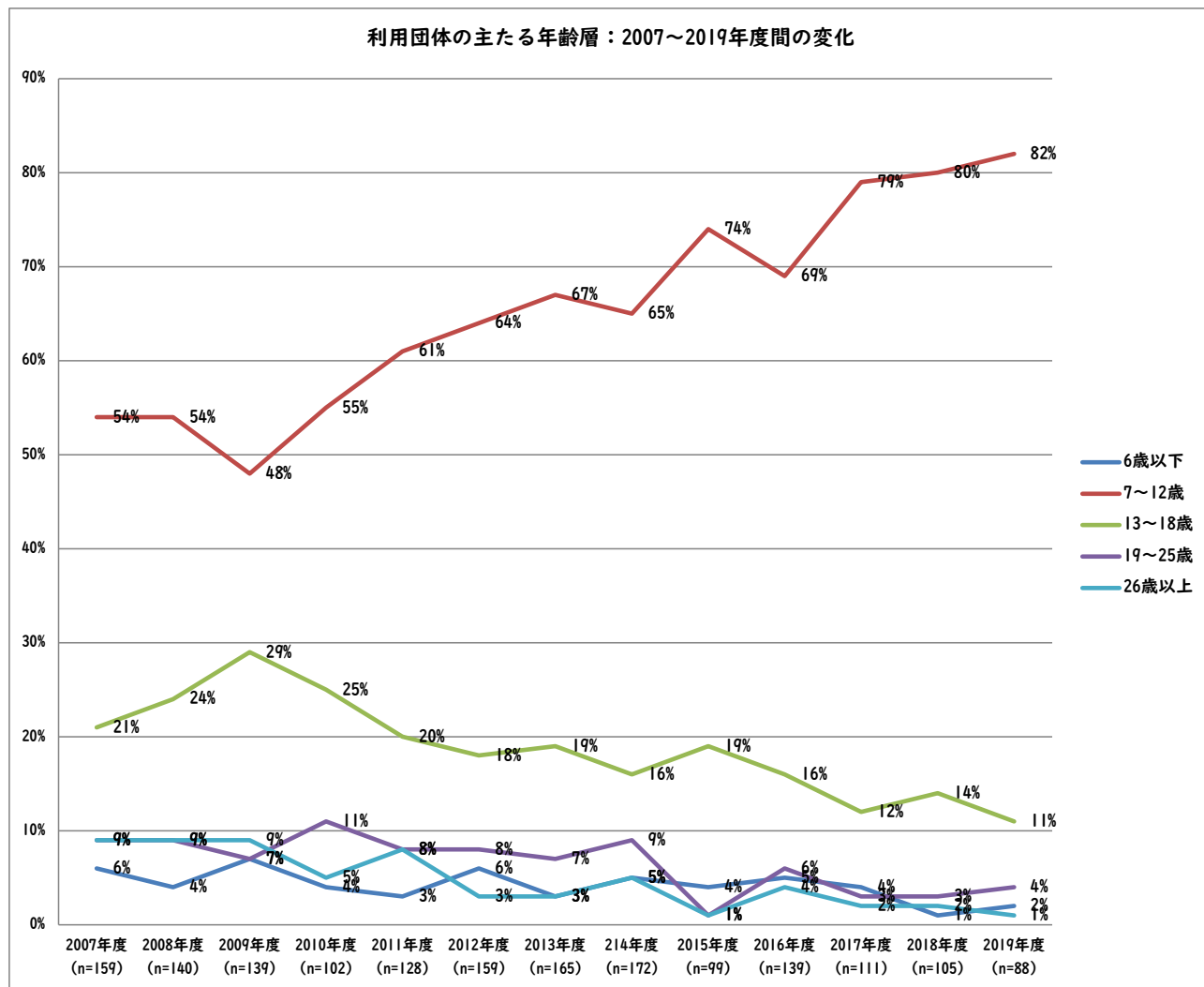


図4 利用団体の主たる年齢層：2007～2019年度間の変化

さらに利用宿泊数については（図5）、「2泊」の比率が最も高く（48%）、次いで高いのは「1泊」（47%）であるが、両者ほぼ同比率である。なお、両者で全体の95%を占めている。

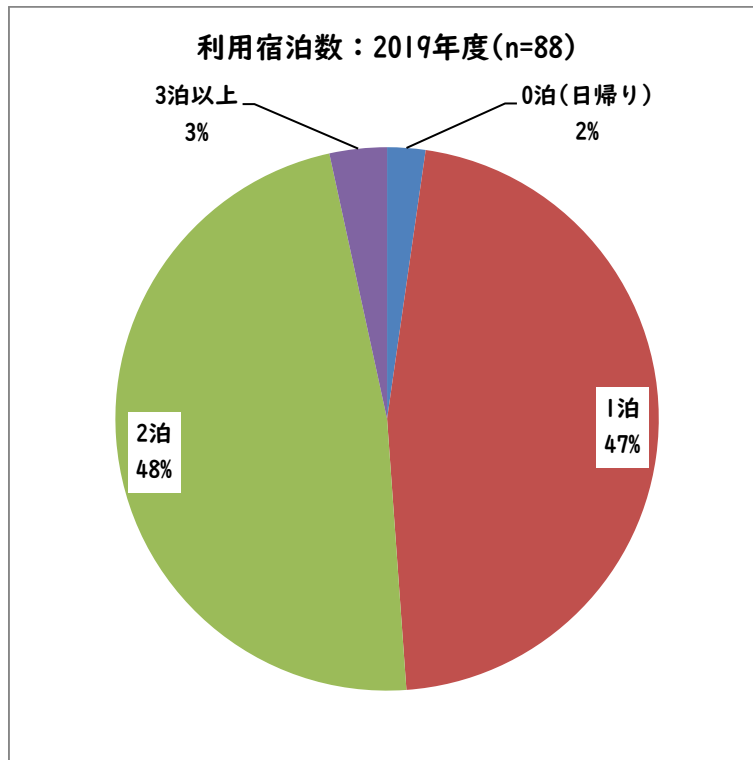


図5 利用宿泊数

この利用宿泊数を13年間の変化でみると（図6）、8年目までは「1泊」が最も高い比率で、9年目以降は「2泊」が最も高くなっている。

なお、「1泊」と「2泊」の全体における占有率は、2年目までは7割台、3～6年目は8割台、7年目以降は9割台で推移している。一方、「0泊（日帰り）」と「3泊以上」の占有率については、2年目までは2割を超えていたが、3～8年目は概ね1割台、9年目以降は1ケタ台の比率で推移している。

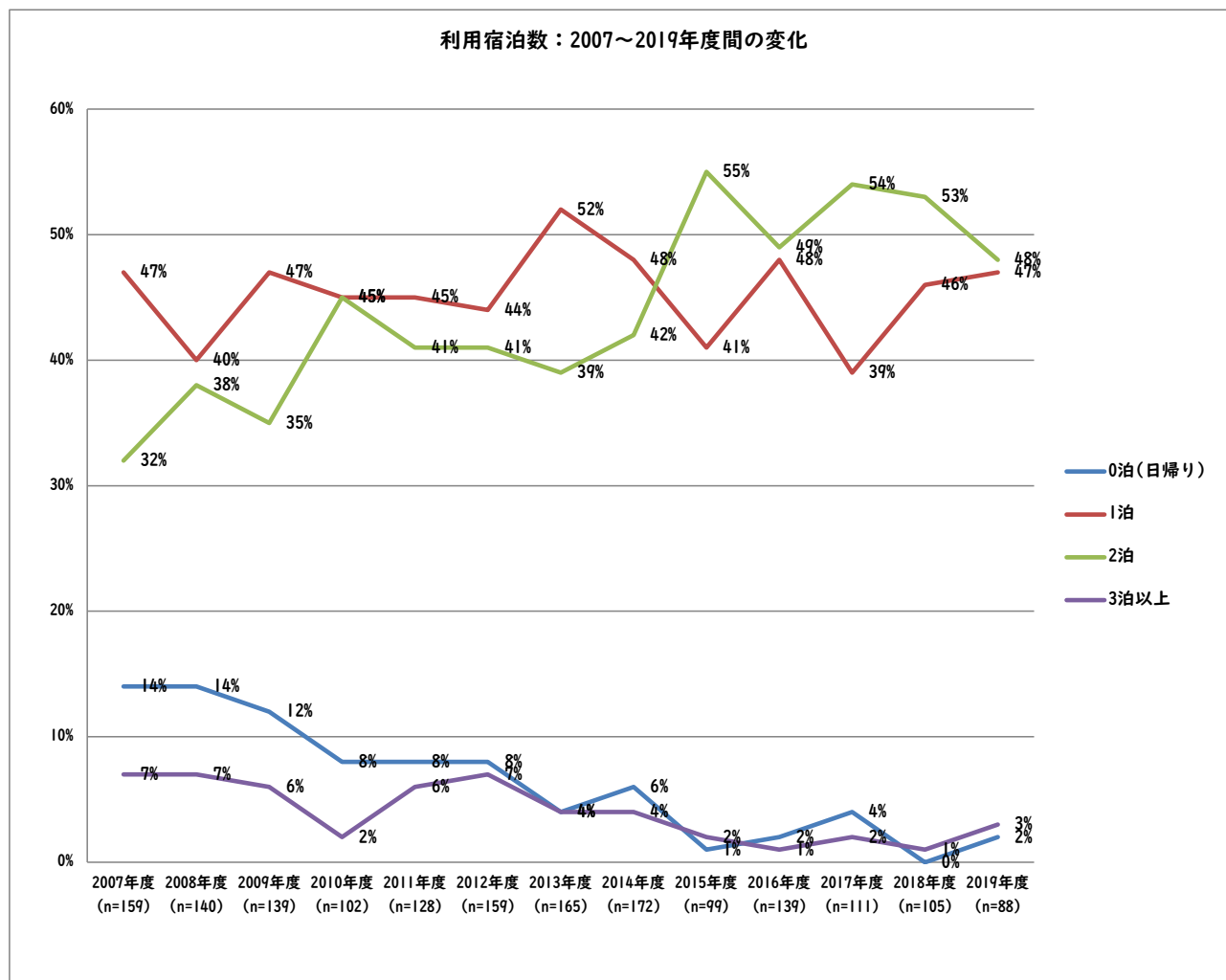


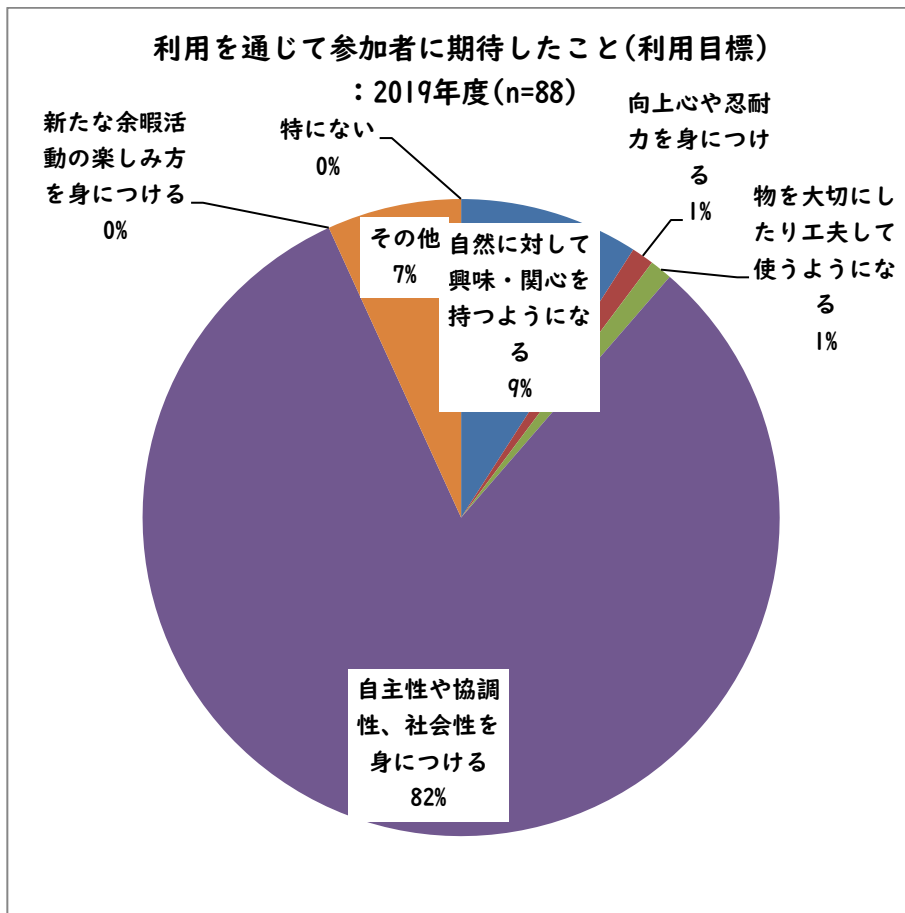
図6 利用宿泊数：2007～2019年度間の変化



## 2. 利用を通じて参加者に期待したこと（利用目標）

ここでは、各団体が利用を通じて参加者に期待したこと（利用目標）（単数回答）を取り上げるが、ここでの項目は、青少年の野外教育の振興に関する調査研究協力者会議報告『青少年の野外教育の充実について』（1996年7月24日）で挙げられている「野外教育の目標」および「野外教育に期待される成果」を参考にした（[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/sports/003/toushin/960701b.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/sports/003/toushin/960701b.htm)、2021年2月11日閲覧）。

図7で示されるように、最も比率の高い利用目標は「自主性や協調性、社会性を身につける」（82%）が全体の約8割を占めていて、次いで「自然に対して興味・関心を持つようになる」（9%）、「その他」（7%）が続いている。



### 「その他」の内訳

さまざまな文化を感じる、知る。自己肯定感を育む。指導能力の向上。聖書を学ぶこと、そして生活の中での実践及び応用について学ぶ。仲間と協力することの大切さについて考える。人間関係論の修了と自己及び他者への理解を深める。

図7 利用を通じて参加者に期待したこと（利用目標）

この利用目標の13年間の変化については（図8）、「自主性や協調性、社会性を身につける」は13年間を通じて常に最も比率の高い項目である。4年目以降は60%以上の比率で推移し、特に9年目と12年目は70%台に達し、13年目では80%を超えている。次いで比率の高い項目については、6年目以降は「自然に対して興味・関心を持つようになる」である。

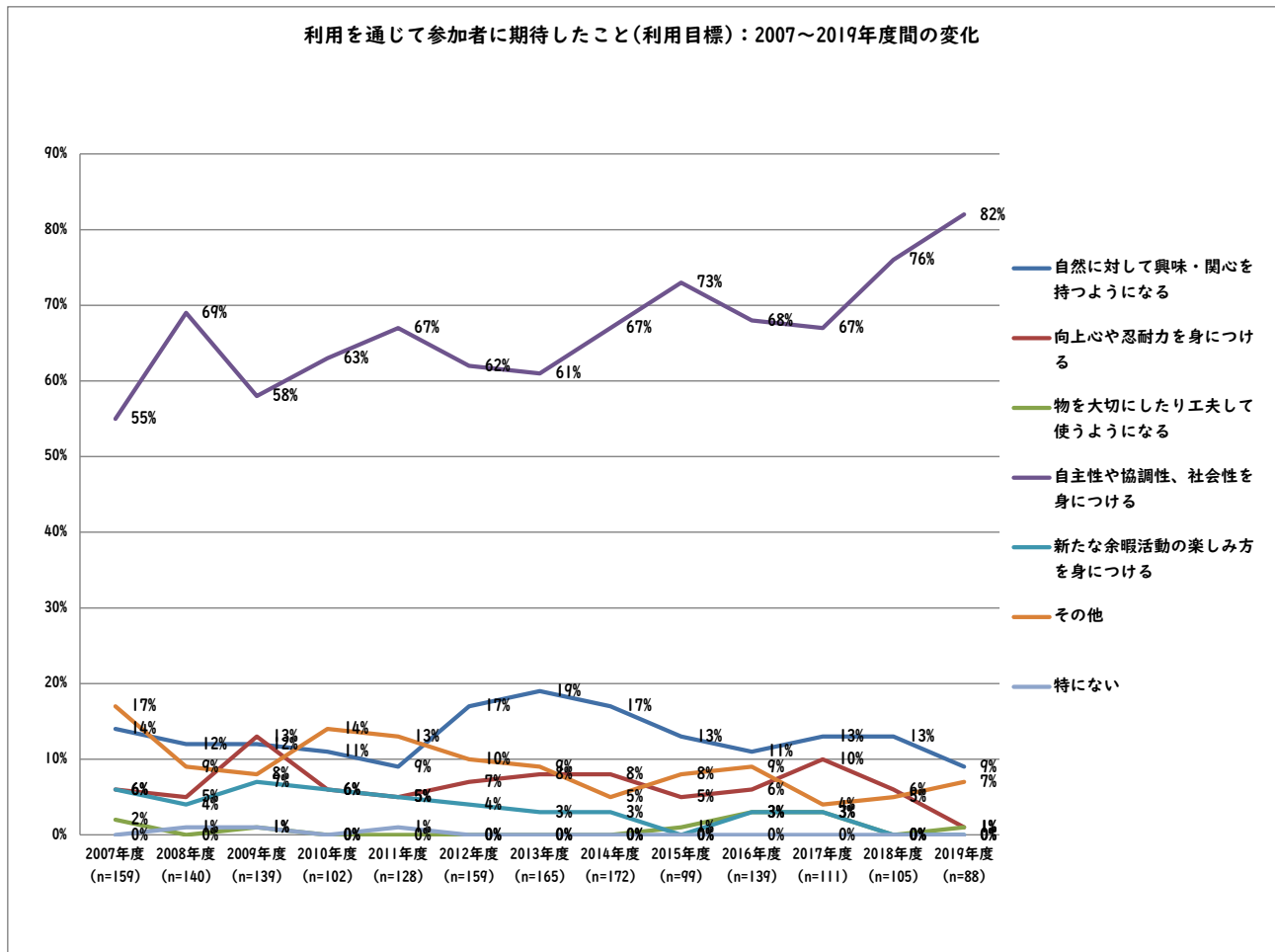


図8 利用を通じて参加者に期待したこと（利用目標）：2007～2019年度間の変化

### 3. 利用目標の達成度

利用目標の達成度については、各利用団体が挙げた「利用を通じて参加者に期待したこと（利用目標）」について、今回の利用を通じて期待通り達成できたかどうかを、「期待以上にできるようになった」「だいたい期待通りできるようになった」「ほとんど期待通りできなかった」「まったく期待通りできなかった」の4段階のいずれかで各団体自身が判断している（回答者は利用団体担当者である。なお、回答者の選定は各団体の任意による）。

その結果、図9の通り、「だいたい期待通りできるようになった」の比率が最も高く（83%）、次いで高いのは「期待以上にできるようになった」の15%で、両者の合計がほぼ全体を占めている。

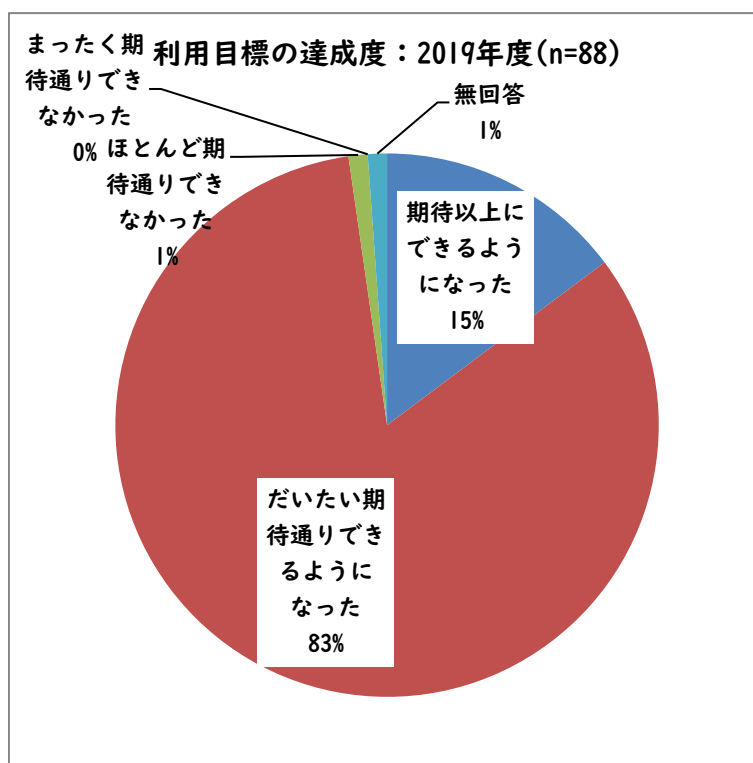


図9 利用目標の達成度

この達成度の13年間の変化については（図10）、「だいたい期待通りできるようになった」は12年間を通じて70%以上の比率である。「期待以上にできるようになった」については、5年目までは10%台、9～12年目は20%台で推移していたが、13年目で10%台に落ち込んでいる。

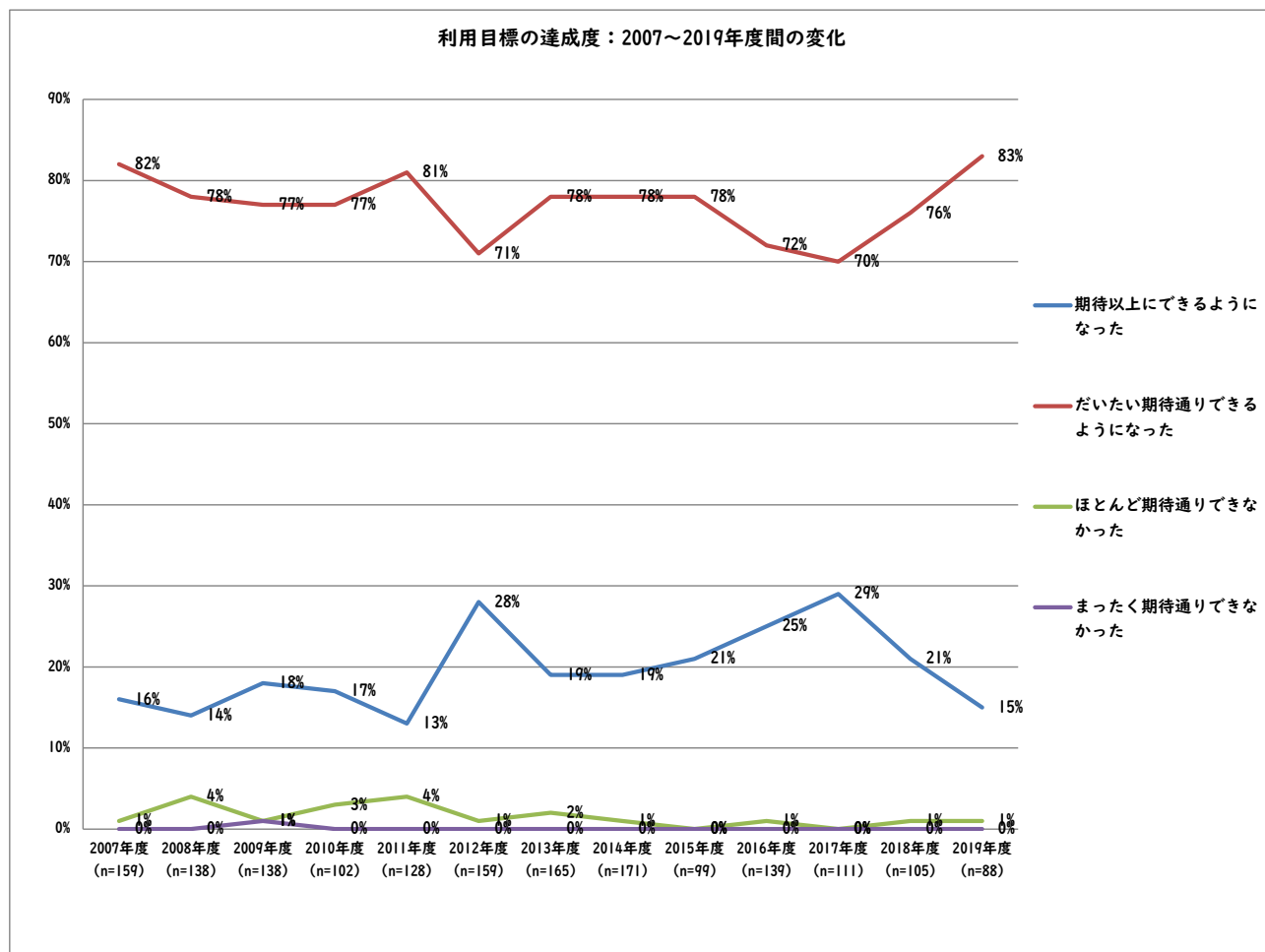
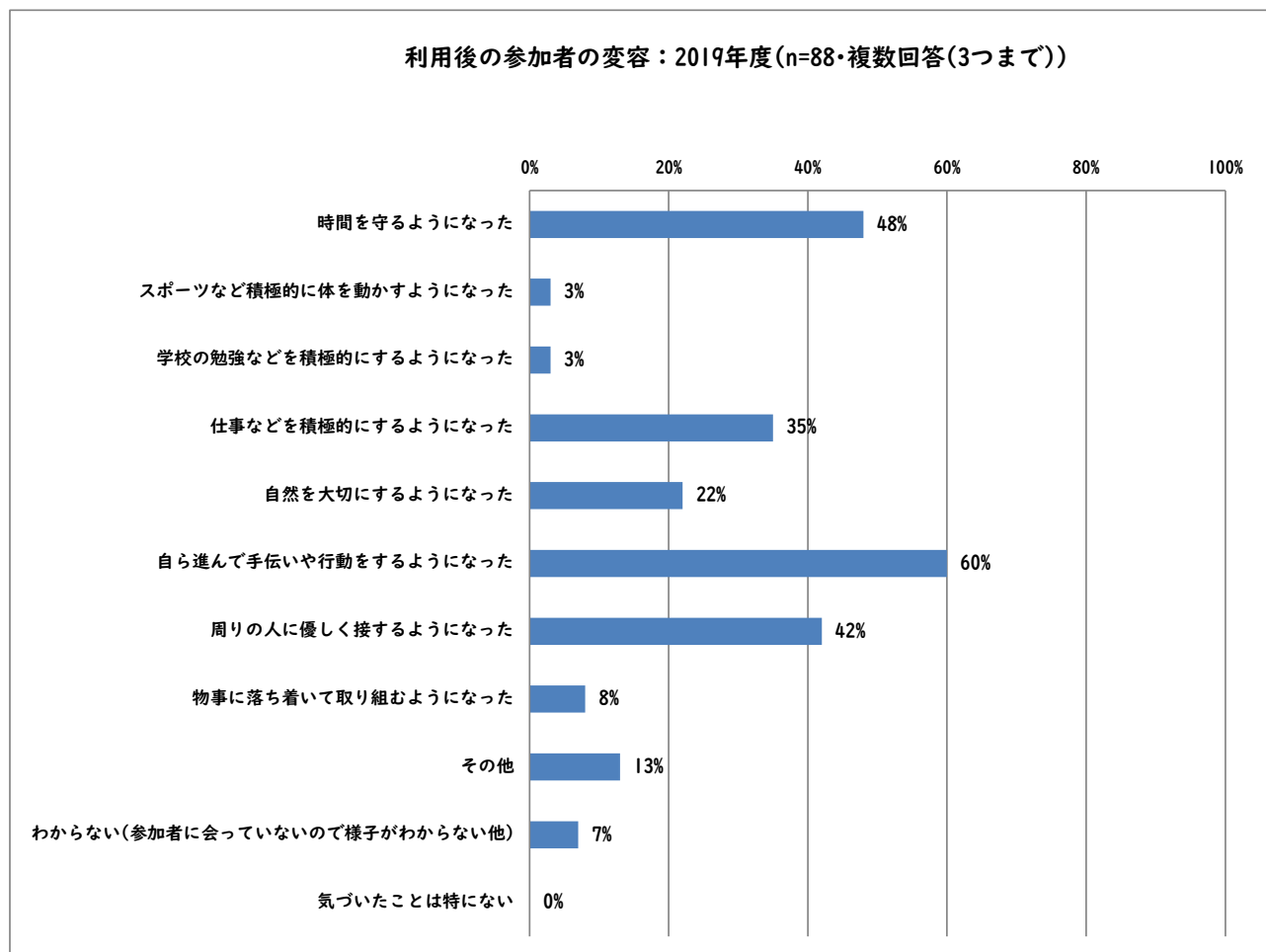


図10 利用目標の達成度：2007～2019年度間の変化

#### 4. 利用後の参加者の変容

利用後の参加者の変容については、利用後1ヶ月以内の変容について利用団体担当者が分かる範囲で捉えているが（複数回答・3つまで）、その結果は、「自ら進んで手伝いや行動をするようになった」の比率が最も高く（60%）、次いで「時間を守るようになった」（48%）、「周りの人に優しく接するようになった」（42%）、の順に高くなっている（図11参照）。



#### 「その他」の内訳

あいさつが自らできるようになった。天の川や七夕について、具体的に話をする。命をいただく（食べ物）ことに感謝の言葉を言うようになった。仕事を責任をもって行う、忘れずに行う。集合した時の私語が減った。大変なことでもがんばってやりぬく。友達関係が広がった、良好になった。友達と協力して様々な活動に取り組むようになった。友達と協力するようになった。友達との関わりが深くなった。仲間と協力する大切さに気づいた。

図11 利用後の参加者の変容

この13年間の変化について（図12）、「自ら進んで手伝いや行動をするようになった」の比率は、4年目までは30%台、5～11年目は40%台で推移し、12年目で50%、13年目で60%に達しており、13年間で28ポイント上昇している。「時間を守るようになった」及び「周りの人に優しく接するようになった」も同じような推移の仕方をしており、13年間でともに10ポイント以上高くなっている。「仕事などを積極的にするようになった」は、7年目までは20%台、8年目以降は30%台で推移しており、13年間で12ポイント高まっている。一方、「スポーツなど積極的に体を動かすようになった」の比率は、13年間で10ポイント低下している。

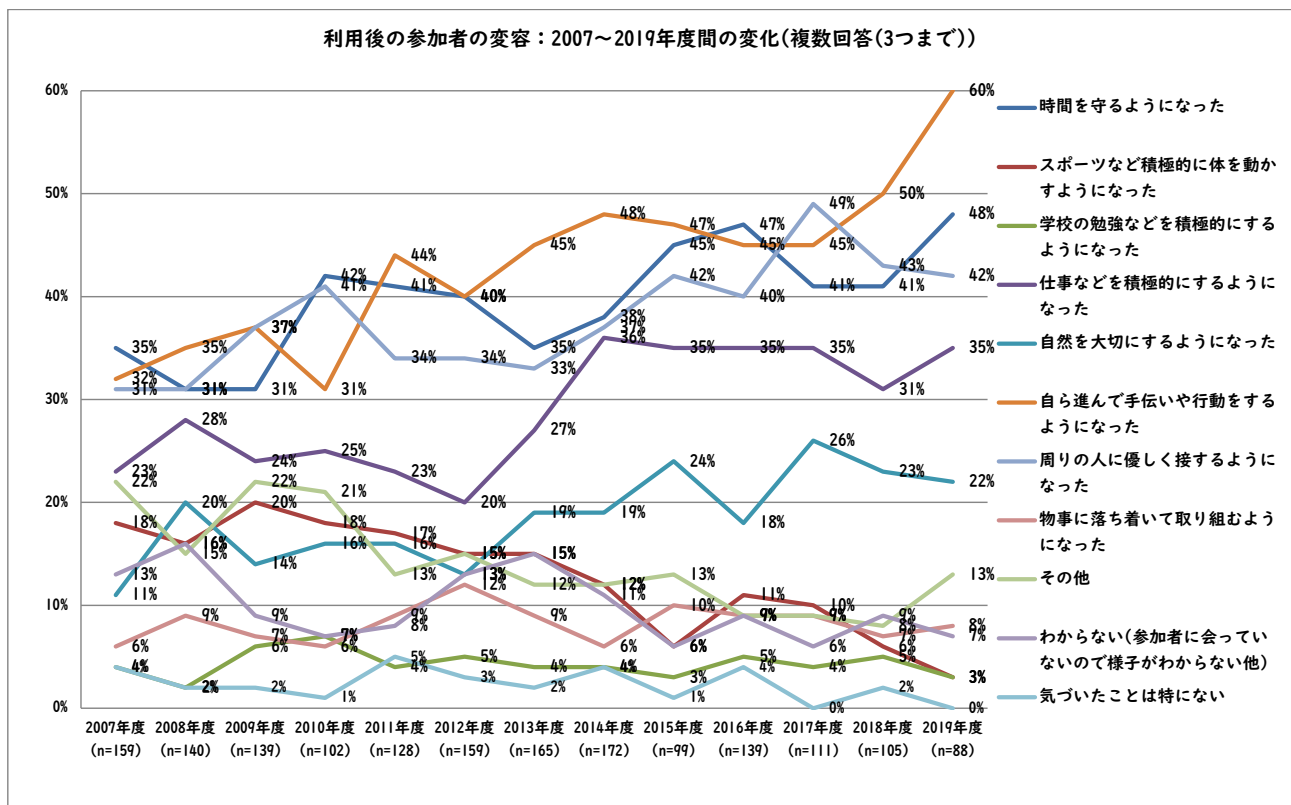
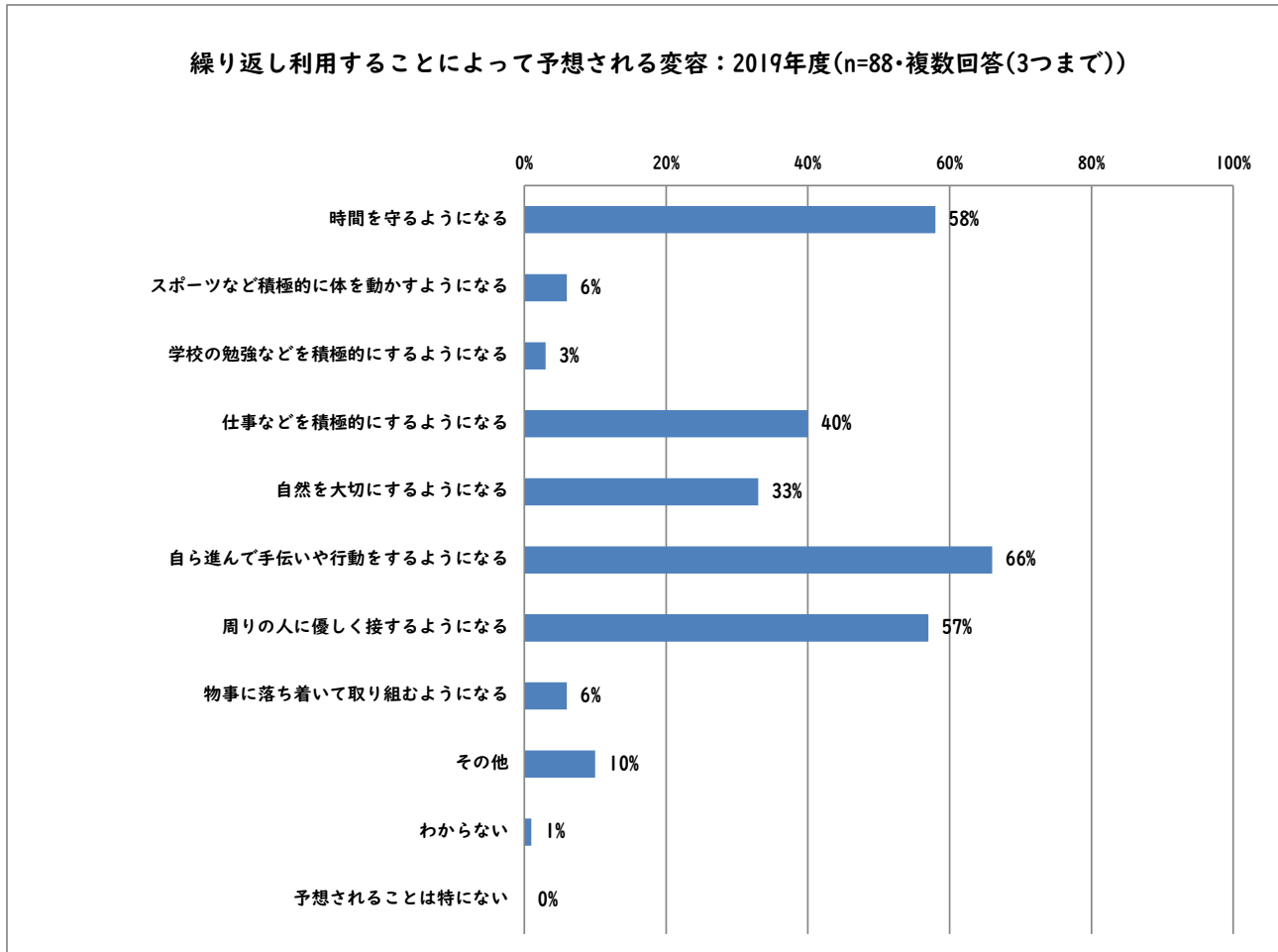


図12 利用後の参加者の変容：2007～2019年度間の変化

## 5. 繰り返し利用することによって予想される変容

繰り返し利用することによって予想される変容は、利用後の参加者の変容と同じ項目について、今回各団体がそれぞれ計画した活動を繰り返し実施することによって日常の参加者に現れると予想されるもので捉えている（複数回答・3つまで）。その結果、「自ら進んで手伝いや行動をするようになる」の比率が最も高く（66%）、次いで「時間を守るようになる」（58%）、「周りの人に優しく接するようになる」（57%）が続いている（図13参照）。



### 「その他」の内訳

一日のスケジュールを見て、次は何をするのか、その次は…と先を見て行動できるようになる。協力して仕事に取り組むようになる。協力、団結を意識し始めた。様々な事象に興味を持つようになっていく。自分で判断する力がのびる。自分の役割を的確に果たすようになる。自分を愛することが出来るようになる。集団行動のルールやマナーを守ろうとする心。多様な人格に対しての慣れ。

図13 繰り返し利用することによって予想される変容

繰り返し利用することによって予想される変容は2年目調査から加わった項目であるため、図14の通り12年間の変化を示すことになるが、それによると12年間通じて、「時間を守るようになる」「自ら進んで手伝いや行動をするようになる」「周りの人に優しく接するようになる」の上位3項目は変わらない。特に、「自ら進んで手伝いや行動をするようになる」の8年目以降は、60%以上を保ち、かつ第1位の比率である。「時間を守るようになる」は、11年目までは50%前後で推移していたところ、12年目で60%に達している。一方「スポーツなど積極的に体を動かすようになる」は、4年目までは20%前後、5～8年目は10%台で推移していたが、12年目は5%まで落ち込んでいる。

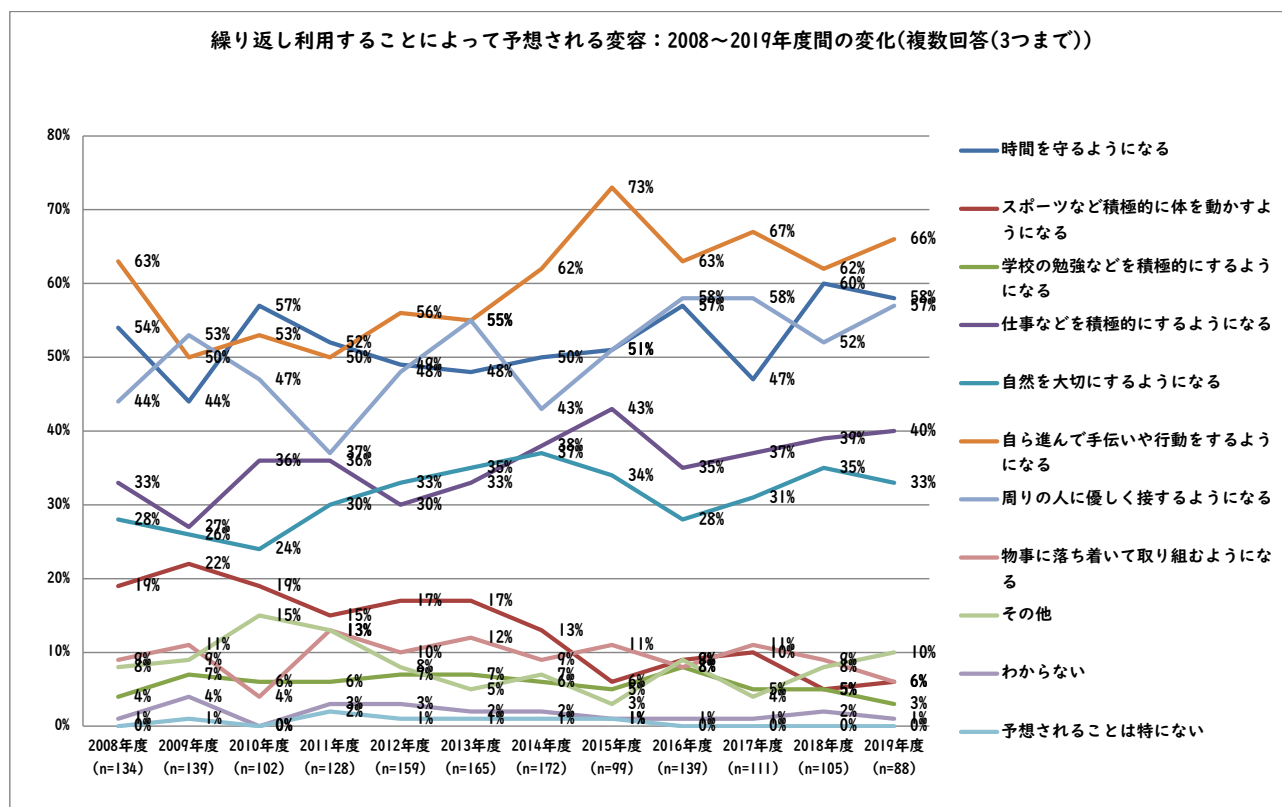


図14 繰り返し利用することによって予想される変容：2008～2019年度間の変化



#### IV 調査結果のまとめと今後の課題

##### 1. 調査結果のまとめ

- (1) 利用団体のプロフィール（利用団体の種類・利用団体の主たる年齢層）については、小学校相当が殆どを占めつつある。例えば、「小学校」では、1～3年目は20%台、4～7年目は30%台で推移しているが、8年目で40%台、9～10年目で50%台に達し、11年目以降は60%台に達している。
- (2) 利用目標の種類について、「自主性や協調性、社会性を身につける」は13年間を通じて常に最も比率の高い項目である。4年目以降は60%以上の比率で推移し、特に9年目と12年目は70%台に達し、13年目では80%を超えている。次いで比率の高い項目については、6年目以降は「自然に対して興味・関心を持つようになる」である。
- (3) 利用後の参加者の変容について、「自ら進んで手伝いや行動をするようになった」の比率は、4年目までは30%台、5～11年目は40%台で推移し、12年目で50%、13年目で60%に達しており、13年間で28ポイント上昇している。「時間を守るようになった」及び「周りの人に優しく接するようになった」も同じような推移の仕方をしており、13年間でともに10ポイント以上高くなっている。「仕事などを積極的にするようになった」は、7年目までは20%台、8年目以降は30%台で推移しており、13年間で12ポイント高まっている。
- (4) 繰り返し利用することによって予想される変容について、調査が行われた12年間通じて、「時間を守るようになる」「自ら進んで手伝いや行動をするようになる」「周りの人に優しく接するようになる」の上位3項目は変わらない。特に、「自ら進んで手伝いや行動をするようになる」の8年目以降は、60%以上を保ち、かつ第1位の比率である。「時間を守るようになる」は、11年目までは50%前後で推移していたところ、12年目で60%に達している。

##### 2. 今後の課題

本調査は回収サンプル数（率）の低さはもとより、その偏りもあるため即断できないが、13年間の傾向を一応の仮説として、今後検証を加えていくことが期待される。その一方で、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の感染拡大による、本調査年度（2019年度）末からの利用団体の減少（キャンセル）および利用形態の変化は本調査にあっても見逃すことができない。しかも、この変化は次年度（2020年度）にあって拡大しており、それ以降も続くことが予想される。加えてこの変化は、センター利用による教育的効果そのものの在り方にも影響を及ぼす可能性がある。

したがって、これまでの傾向把握を継続しつつも、単調な傾向把握に終始するのではなく、いわゆるコロナ禍を境目とした解釈も加える必要があるだろう。これは本調査に課せられた新たな課題となるに違いない。